

法然における源信教学の受容と展開

福 原 隆 善

序

源信（九四二—一〇一七）の著した『往生要集』^①によって浄土の法門に入ったという法然（一一三三—一二二二）は、やがて中国の善導（六一三—六八二）の導きによって本願念仏に基く浄土宗を開くことになるが、その要義を表明するにあたっては源信から受けた種々の影響がみられる。本稿は法然法語にみられる源信の影響を探ることを目的としている。

法然における源信の影響を探るために、法然の法語を調査し、源信もしくは源信の著作の引用をとりだし、その傾向を調査した。そして次の内容に分類できることが解った。(1)念仏のこと、および念仏を勧めるもの、(2)念仏と諸行に関するもの、(3)仏お

よび仏の名号の功德に関するもの、(4)寿命の功德に関するもの、(5)光明の功德に関するもの、(6)弥陀の依正に関するもの、(7)善導の義を補助するもの、(8)雑行と諸行に関するもの、(9)往生を勧める経論に関するもの、(10)三心に関するもの、(11)兜率浄土と西方浄土に関するもの、(12)別時念仏に関するもの、(13)平生の念仏と臨終の念仏に関するもの、(14)念仏者の相に関するもの、(15)十六観・三福・九品に関するもの、(16)対天台に関するもの、以上の項目に分類することができる。この中、とくに(1)から(5)の項目については、分量的に(6)以下の項目をしのぐものであり、その影響の大きさを知ることができる。それは必ずしも回数が多さによってのみ影響力の大きさを決められるものではないが、回数とともに内容的にも、種々の影響を受けていることが知ら

れるので、このことについて検討を加えてみたい。

一

法然法語に現われた源信について、序に示した分類にしたがつてまず検討するための資料を示してみよう。

(1) 念仏のこと、および念仏を勧めるもの

① 選擇本願念佛集

私問曰、經唯云「特留此經止住百歲」、全不云「特留念佛止住百歲」。然今何云「特留念佛」之哉。答曰、此經所詮全在「念佛」。其旨見前。不_レ能_二再出_一。善導懷感惠心等意亦復如是。然則此經止住者即念佛止住也。^②

② 修學についての御物語

我昔出離の道に煩て、寢食やすからず、多年心勞の後、往生要集を披覽するに、序曰、夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也。道俗貴賤、誰不_レ歸者。但顯密教法、其文非_レ一。事理業因、其行惟多。利智精進之人、未_レ爲_レ難。如_レ予頑魯之者、豈敢矣。是故依「念佛一門」、聊集「經論要文」、披_レ之修_レ之、易_レ覺易_レ行云云。序は略して一部の奥旨をのぶ。まさしく依「念佛一門」云云。文に入て委探

に、此集に十門をたつ。其中に厭離穢土、欣求淨土、極樂證據等の三門は、行體にあらず。しばらくこれををく。のこる所の七門は念佛の助成也。第四の一門はすなはち正修念佛也。これをもて此宗の正因とす。此故に予、往生要集を先達として淨土門に入也と云云。^③

③ 九條殿下の北政所へ進ずる御返事

彌陀ノ本願ニアラサル餘行ヲキラヒステテ、マタ釋尊ノ付屬ニアラサル行オハエラヒトトメ、マタ諸佛ノ證誠ニアラサル行オハヤメオサメテ、イマハタタ彌陀ノ本願ニマカセ、釋尊ノ付屬ニヨリ、諸佛ノ證誠ニシタカヒテ、オロカナルワタクシノハカラヒヤヤメテ、コレラノユヘ、ツヨキ念佛ノ行ヲツトメテ、往生オハイノルヘシト申ニテ候也。コレハ惠心僧都ノ往生要集ニ往生ノ業念佛ヲ本トスト申タル、コノココロ也。イマハタタ餘行ヲトメテ、一向ニ念佛ニナラセタマフヘシ。念佛ニトリテモ、一向專修ノ念佛也。ソノムネ三昧發得ノ善導ノ觀經ノ疏ニミエタリ。マタ雙卷經ニ、一向專念無量壽佛トイヘリ。一向ノ言ハ、二向三向ニ對シテ、ヒトヘニ餘ノ行ヲエラヒテ、キラヒノソクココロナリ。御イノリノレウニモ、念佛カメテタク候。往生要集ニモ、餘行ノ中ニ、念佛ス

クレタルヨシエタリ。⁽⁴⁾

④往生淨土用心

前業のかれかたくて、たちかたなにていのちをうしなひ、火にやけ、水におほれて、いのちをほろぼすたくひおほく候へは、さやうにてしに候とも、日ころの念佛申て極樂へまいる心たにも候人ならば、いきのたえん時に、阿彌陀觀音勢至、きたりむかへ給へしと信じおほしめすへきにて候也。往生要集にも、時所諸縁を論せず、臨終に往生をもとめねかふに便宜をえたる事、念佛にはしかすと候へは、たのもしく候。⁽⁵⁾

⑤遣空阿彌陀佛書

抑凡夫出離生死、不_レ如_二往生淨土_一、往生之業雖_レ多、不_レ如_二稱名念佛_一候。稱名往生、是彼佛本願行也。故善導和尚云。如_二無量壽經_一云、若我成佛、十方衆生、稱_二我名號_一、下至_二十聲_一、若不_レ生者、不_レ取_二正覺_一。彼佛今現在_二世成佛_一。當_レ知、本誓重願不_レ虛、衆生稱念必得_二往生_一。已上故知、稱名往生是彌陀本願也。故念佛之時可_レ作_二是觀_一、本願不_レ誤必垂_二引攝_一、此外別觀行不_レ可_レ候歟。又往生要集臨終行儀云。應_レ作_二是念_一、如來本誓一毫無_レ謬、佛決定引_二

攝我、南無阿彌陀佛。或漸々取_レ要應_レ念、願佛必引攝。南無阿彌陀佛。已上臨終觀念取_レ要不_レ過_二之候歟_一。⁽⁶⁾

⑥聖光房に示される御詞 其一

上人問云。汝爲_二出離_一行_二何法_一耶。答申云。勸_二人建_二五重塔_一候。又常時行法者念佛候也。云云。上人云。所_レ立塔者如_二善導御意_一者、判_二難行_一而名_二疎雜之行_一。所_レ行之念佛者判_二正行_一正所_レ勸之行也。但念佛言廣通_二八宗九宗_一。汝念佛何耶被_レ問之時、不_レ知_二智分邊際_一如_レ望_二大海_一。又云汝天台宗學徒也。仍分_二別_二三念_一念佛義可_レ奉_レ令_レ聞。一摩訶止觀念佛、二往生要集念佛、三善導勸化念佛也。云云。此三重被_二立替_一事微微細細也。教化及_二于多時_一自_レ未至_二子_一、是時辨阿如_レ聞_二釋尊說法_一、似_レ值_二善導教化_一。心大歡喜解行全學_二上人行儀_一。⁽⁷⁾

⑦聖光房に示される御詞

然間歎歎入_二經藏_一、悲悲向_二聖教_一手自披_レ之見_レ之、善導和尚觀經疏云_二一心專念彌陀名號_一、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者是名正定之業、順彼佛願故_二文見得之後_一、如_二我等_一無智之身偏仰_二此文_一專憑_二此理_一、修_二念念不捨之稱名_一備_二決定往生之業因_一、非_二普信_一善導之遺教亦厚順_二彌陀之

弘願。順彼佛願故之文染_レ神留_レ心耳。其後又披_二慧心先德往生要集文_一云_二往生之業念佛爲_レ本。又見_二慧心妙行業記之文_一云_二往生之業念佛爲_レ先。覺超僧都問_二慧心僧都_一云、汝所_レ行之念佛是爲_レ行_レ事、是爲_レ行_レ理如何。慧心僧都答云、心遮_二萬境_一是以我但行_二稱名_一也。往生之業稱名尤足。依_レ之_二一生念佛勸_二其員數_一二十俱胝返也。云_二然則源空隨_二大唐善導和尚之教_一、任_二本朝慧心先德之勸_一稱名念佛之勸長日六萬返也。依_二死期漸近_一又加_二一萬返_一長日七萬返之行者也。^⑧

⑧ 良忠上人傳聞の御詞

先師云、故上人云、諸師作_レ文必本意有_レ一。慧心立_二因明直辨之義_一、善導釋_二本願念佛一義_一。予立_二選擇一義_一造_二選擇集_一也。云_二云_一^⑨

⑨ 七箇條の起請文

三に廻向發願心といふは、無始よりこのかたの所作のもろくの善根を、ひとへに往生極樂といのる也。又つねに退する事なく念佛するを、廻向發願心といふなり。これは恵心の御義也。この心ならば至誠心深心具足してのうゑに、つねに念佛の數遍をすへし。もし念佛退轉せば、回向發願

心かけたるもの也。浄土宗の人は、三心のやうをよくく心えて念佛すべき也、三心のなかに、ひとつもかけなは往生はかなふましき也。^⑩

⑩ 要義問答

同キ經ノ文ニ、一一ノ光明、十方世界ノ念佛ノ衆生ヲテラシテ、攝取シテステタマハストケリ。善導釋シテノタマフニハ、論セス餘ノ雜業ノモノヲテラシ攝取ストイフコトオハトカス候。餘行ノモノフツトムマレストハイフニハアラス、善導モ廻向シテムマルヘシトイエトモ、モロモロノ疎雜ノ行トナツクトコソハ、オホセラレタレ。往生要集ノ序ニモ顯密ノ教法、ソノ文ヒトツニアラス、事理ノ業因、ソノ行コレオホシ、利智精進ノ人ハ、イマタカタシトセス、予カコトキノ頑嚙ノモノ、タヤスカラムヤ。コノユヘニ念佛ノ一門ニヨリテ、經論ノ要文ヲアツム、コレヲヒラキ、コレヲ修スルニ、サトリヤスク行シヤスシトイフ。コレヲノ證據アキラメツヘシ、教ヲエラフニハアラス、機ヲハカラフナリ。^⑪

⑪ 要義問答

問、浄土ノ法門ニ、マツナニナニヲミテココロツキ候ナム。

答、經ニハ雙卷觀無量壽小阿彌陀經等、コレヲ淨土ノ三部經トナツク。文ニハ善導ノ觀經ノ疏六時禮讚觀念法門、道綽ノ安樂集、慈恩ノ西方要決、懷感ノ群疑論、天台ノ十疑論、ワカ朝ノ人師惠心ノ往生要集ナムトコソハ、ツネニ人ノミルモノニテ候ヘ。タタナニヲ御覽ストモ、ヨク御ココロエテ、念佛申サセタマハムニ、往生ナニカウタカヒ候ヘキ。⁽¹²⁾

⑫百四十五箇條問答

一。この眞如觀はし候へき事にて候か。

答。これは惠心のと申て候へとも、わるき物にて候也。おほかた眞如觀をは、われら衆生は、えせぬ事にて候ぞ、往生のためにもおもはれぬことにて候へは、無益に候。⁽¹³⁾

⑬十七條御法語

又云、餘宗ノ人淨土門ニソノ志アラムニハ、先往生要集ヲモテ、コレヲオシフヘシ。ソノユヘハ、コノ書ハモノニココロエテ、難ナキヤウニソノ面ヲミエテ、初心人ノタメニヨキ也。雖^レ然眞實ノ底ノ本意ハ、稱名念佛ヲモテ、專修專念ヲ勸進シタマヘリ。善導ト一同也。⁽¹⁴⁾

⑭十七條御法語

又云、善導與^ニ惠心^一相違義事。

善導ハ色相等ノ觀法オハ、觀佛三昧ト云ヘリ。稱名念佛オハ、念佛三昧ト云ヘリ。惠心ハ稱名觀法合シテ念佛三昧ト云ヘリ。⁽¹⁵⁾

⑮十七條御法語

又云、稱名ノ行者常途念佛ノトキ、不淨ヲハハカルヘカラス、相續ヲ要トスルカユヘニ。如意輪ノ法ハ、不淨ヲハハカラス、彌陀觀音一昧不二也。コレヲオモフニ、善導ノ別時ノ行ニハ、清淨潔齋ヲモチキル。尋常ノ行、コレニコトナルヘキ歟。惠心ノ不論時處諸緣之釋、永觀ノ不論身淨不淨之釋、サタメテ存スルトコロアル歟ト云。⁽¹⁶⁾

⑯十七條御法語

又云、善導ハ第十八ノ願、一向ニ佛號ヲ稱念シテ往生スト云リ。惠心ノココロ、觀念稱念等、ミナコレヲ攝スト云リ。モシ要集ノココロニヨラハ、行者ニオイテハ、コノ名ヲアヤマテラム歟ト。⁽¹⁷⁾

⑰登山狀

いま下三品の業因を見れば、十惡五逆の衆生、臨終に善知識にあひて、一聲十聲阿彌陀佛の名號をとなへて、往生すとかれたり。これなんそわれちか分にあらさんや。かの釋の雄俊といひし人は、七度還俗の惡人也。いのちおはりてのち、獄率、閻魔の廳庭にゐてゆきて、南閻浮提第一の惡人七度還俗の雄俊ゐてまいりてはんへりと申ければ、雄俊申ていはく、われ在生の時觀無量壽經を見しかは、五逆の罪人阿彌陀ほとけの名號をとなへて、極樂に往生すつまさしくとかれたり。われ七度還俗すといへとも、いまた五逆をはつくらす、善根すくなしといへとも、念佛十聲にすぎたり。雄俊もし地獄におちる三世諸佛妄語のつみにおち給ふへしと、高聲にさけひしかは、法王は理におれて、たまのかふりをかたふけてこれをおかみ、彌陀はちかひによりて金蓮にのせてむかへ給ひき。いはんや七度還俗におよはさんをや、いはんや一形念佛せんをや。男女貴賤、行住坐臥をえらはす、時處諸縁を論せず、これを修するにかたからず、乃至臨終に往生を願求するに、そのたよりをえたりと、楞嚴の先德のかきおき給へる、ま事なるかなや。¹⁸⁾

(2)念佛と諸行

⑱無量壽經釋

私云、凡此文者は行者至要也。專難之訓、得失之誠、甚以苦也、求極樂之人盡貯寸符哉。若夫拋難修專者、百即百生、如非迂向直、豈以不届也。捨專修難者、千中無一、如捨夷趣嶮、遂以弗達矣。往生要集下云。問若凡下輩亦得往生、云何近代於彼國土求者千萬、得無一二。答。綽和尚云。信心不深、若存若亡故。信心不_レ一、不決定_二故。信心不_レ相續、餘念間故。此三不_二相應_一故不能往生。若具三心者不_二往生者_一、無有_二是處_一。導和尚云。若能如_レ上念念相續畢命爲_レ斯者、十即十生。若欲捨_レ專修難業者、百時希得一二、千時希得三五。已上此問答意明。以善導和尚二修、欲決往生極樂之行者也。意云。若依專修而行用者、千萬悉生。若據難業而欣求者一二_レ生。既惠心意、於西方行、以導和尚、而爲指南。其餘末學、寧不_二依憑_一。既知、惠心尚以敘用、何況於其餘世人乎。¹⁹⁾

⑲無量壽經釋

問。付念佛一法、何分三品。此且有_二三義_一。一約返數多少、二約時節長短、三約觀念淺深。一約返數分者、

善導釋云。毎日三萬返上品業。云云以之案之、二萬中、一萬下也。是則約返數多少分三品義也。九品准之。二約時節者、源信僧都彌陀經記中以彼經七日念佛爲上品。彼因准之、或以十日念佛、可爲上々品。是即一往約時節久近、分三品也、九品准之。三約觀念淺深者。云云以之案之、今文付念佛立三品也。⁽²⁰⁾

⑳無量壽經釋

次何故猶念佛行昌耶。今此經中委尋之者、於傍正論之者、以念佛爲正、以諸行爲傍。故知、往生之行者、以念佛爲正、以諸行爲傍。然則今行人捨傍爲行正。云云⁽²¹⁾抑上搜善導道綽御意、下依往生要集等意、殊拙愚意、於兩卷經文取要抽詮、粗解釋了。若有萬一諧佛意事、願爲自他俱歸淨土、於菩提、各令得不退、若於文理、有謬者、願仰大衆御證誠、宜憑三寶照見仰乞。云云

㉑觀無量壽經釋

六下品下生善知識種種安慰爲說妙法等者、善導釋云。四明善人安慰、教令念佛。五明罪人死苦來逼、無由得念佛名。六明善友知苦失念、轉教口稱彌陀名

號。七明念數多少聲聲無間。八明除罪多劫。九明臨終正念即有金華來應。云云惠心釋云。極重惡人無佗方便。云云今依此文、以念佛望孝養等善、念佛勝孝養劣也。豈逆罪者、臨終行孝養行期往生。故廢孝養等劣行。殊勝可付念佛行。云云⁽²²⁾

㉒阿彌陀經釋

重釋二行者、此即依往生要集決釋念佛諸行行相、且置諸行、付念佛一行、彼集立十門、明念佛往生。其中第一念佛證據中、以念佛對諸行、有三番問答。第一問曰。一切善業皆有利益、各得往生、何故唯勸念佛一門。答。今勸念佛、非是遮餘種々妙行、只是男女貴賤不簡行住坐臥、不論時處諸緣、修之不難、乃至臨終願求往生、得其便宜、不如念佛。(中略)今案此文、諸聖教中念佛往生業、其文甚多、以布施等諸行爲往生業、其文即少。云々⁽²³⁾此即少分多分意也。今勸念佛往生者、依多分意。云々

㉓阿彌陀經釋

此三番問答中、問者雖三、案答文全有五六義、一難易義、二多分少分義、三因明直辨義、四本願非本願義、五光

明攝取不攝取義、六如來隨宜四依理盡義。一難易義者。云々餘第五次第可釋。云々念佛諸行相對決擇事如此、若依此意、聽聞集來人々、且置諸行可令行念佛。⁽²⁴⁾

②4 逆修說法

惠心僧都往生要集往生行立二門、初念佛往生、次諸行往生。念佛往生以三念行、釋成之、諸行往生篇、舉三諸行。其中即有讀誦大乘。又云往生行業、惣而言之不出梵網戒品。准之思之、往生行業不出此經三福業矣。⁽²⁵⁾

②5 逆修說法

又往生要集問曰。一切善業各々有利益、各得往生、何故唯勸念佛一門、答曰。今勸念佛、非是遮餘種種妙行。只是男女貴賤、不簡行住坐臥、不論時處諸緣、修之不难。乃至臨終願求往生、得其便宜、不如念佛。若以布施、爲本願者、貧窮困乏輩、斷往生希望。若以持戒爲本願者、破戒無戒徒、斷往生希望。若以禪定爲本願者、散亂羸動人、不可得往生。若以智慧爲本願者、愚癡無智者、不可得往生。自餘諸行準此應知。然堪布施持戒等諸行者極少、貧窮

破戒散亂愚癡者甚多。若以如上諸行、用爲本願、得往生者甚少、不得往生者甚多矣。法藏大悲遍攝一切、欲得往生。是以唯以稱名一行、立爲本願也。⁽²⁶⁾

②6 選擇本願念佛集

問曰此釋未遮前難。何棄餘行唯云念佛乎。答曰此有三意。一爲廢諸行歸於念佛而說諸行也。二爲助成念佛而說諸行也。三約念佛諸行二門各爲立三品而說諸行也。一爲廢諸行歸於念佛而說諸行者准云善導觀經疏中、上來雖說定散兩門之益、望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名之釋意且解之者、上輩之中雖說菩提心等餘行、望上本願意唯在衆生專稱彌陀佛名。而本願中更無餘行。三輩即共依上本願故、云一向專念無量壽佛也。一向者對二向三向等之言也。例如彼五竺有三寺。一者一向大乘寺、此寺之中無學小乘。二者一向小乘寺、此寺之中無學大乘。三者大小兼行寺、此寺之中大小兼學。故云兼行寺。當知大小兩寺有一向言。兼行之寺無一向言。今此經中一向亦然。若念佛外亦加餘行即非一向。若准寺者可云兼行。既云一向。不兼餘明矣。既先雖說餘行、後云一向專念。明知廢諸行唯用念佛故云一向。若

不爾者一向之言最以匡消歟。二爲助成念佛。說此諸行者此亦有二意。一以同類善根助成念佛。二以異類善根助成念佛。初同類助成者、善導和尚觀經疏中舉五種助行助成念佛一行是也。具如上正雜二行之中說。先就上輩而論正助者、一向專念無量壽佛者是正行也。亦是所助也。捨家棄欲而作沙門發菩提心等者是助行也。亦是能助也。謂往生之業念佛爲本。故爲一向修念佛捨家棄欲而作沙門、又發菩提心等也。就中出家發心等者且指初出及以初發。念佛是長時不退之行也。寧容妨礙念佛也。中輩之中亦有起立塔像懸繡燃燈散華燒香等諸行。是則念佛助成也。其旨見往生要集。謂助念方法中方處供具等是也。下輩之中亦有發心。亦有念佛。助正之義准前可知。三約念佛諸行各爲立三品而說諸行者、先約念佛立三品者、謂此三輩中通皆云一向專念無量壽佛。是則約念佛門立三品也。故往生要集念佛證據門云、雙卷經三輩之業雖有淺深然通皆云一向專念無量壽佛。感師之次約諸行門立三品者、謂此三輩中通皆有菩提心等諸行。是則約諸行立三品也。故往生要集諸行往生門云、雙卷經三輩亦不出此已上。凡如此三義雖有不同、共是所爲一向念佛也。初義卽是爲廢立而說。謂諸行爲廢而說、念佛爲立

而說。次義卽是爲助正而說。謂爲助念佛之正業而說諸行之助業。後義卽是爲傍正而說。謂雖說念佛諸行二門以念佛而爲正、以諸行而爲傍。故云三輩通皆念佛也。但此等三義殿最難知。請諸學者取捨在心。今若依善導以初爲正耳。問曰三輩之業皆云念佛。其義可然。但觀經九品與壽經三輩本是開合異也。若爾者何壽經三輩之中皆云念佛、至觀經九品上中二品不說念佛。至下品始說念佛也。答曰此有二義。一如云問端雙卷三輩觀經九品開合異者以此應知。九品之中皆可念佛。云何得知。三輩之中皆有念佛。九品之中盡無念佛乎。故往生要集云、問念佛之行於九品中是何品攝。答若如說行理當上上。如是隨其勝劣應分九品。然經所說九品行業是示二端。理實無量已上。故知、念佛亦可通九品。二觀經之意初廣說定散之行普逗衆機後廢定散二善歸念佛一行。所謂汝好持是語等之文是也。其義如下具述。故知、九品之行唯在念佛矣。²⁷

② 選擇本願念佛集

次難易義者、念佛易修諸行難修。是故往生禮讚云、問曰何故不令作觀、直遣專稱名字者有何意也。答

曰乃由衆生障重境細心麤、識颺神飛觀難成就也。是以大聖悲憐直勸專稱名字。正由稱名易故相續即生。又往生要集問曰一切善業各有利益各得往生。何故唯勸念佛一門。答曰今勸念佛非是遮餘種種妙行。只是男女貴賤不簡行住坐臥。不論時處諸緣。修之不难乃至臨終願求往生得其便宜不如念佛。已上故知。念佛易故通於一切。諸行難故不通諸機。然則爲令一切衆生平等往生捨難取易爲本願歟。⁽²⁸⁾

②⑧ 源智上人傳聞の御詞

先師語云、我爲出離久求佛法。粗闕顯密諸教都是難解難行。因茲訪楞嚴先德遺跡探往生要集意趣、念佛爲正諸行爲傍。位該上下正爲凡下、述其行相則引道綽善導釋文。故以往生要集而爲先達知淨教之冲微也。⁽²⁹⁾

②⑨ 無量壽經釋

二釋餘諸行者、求極樂者、必不念佛、各隨樂欲修種種行、其行相廣在經論、不能具引之。諸經所說雖其業多。結其要、不出三意。故往生要集云。諸經行業惣而言之、出梵網戒品、別而論之、不出三六

度。⁽³⁰⁾

(3) 仏および名号の功德

③⑩ 逆修說法

次阿彌陀如來別德者、彼佛有八萬四千相、其中以白毫一相爲最勝。故觀經說云。觀無量壽佛者、從一相好入。但觀眉間白毫極令明了、見眉間白毫者、八萬四千相好自然當見。云々善導御意從頭上螺髮至足下千幅輪、於一々相好順逆觀十六遍後、注心眉間白毫莫雜亂。云々然則且可奉讚嘆白毫一相之功德。依惠心御意奉讚白毫功德者、夫有五。謂白毫業因、白毫相良、白毫作用、白毫體性、白毫利益也。(中略)又此白毫一相中有八萬四千相好、相與好大小差別也。大而吉形云相、小而吉形云好也。一々好有八萬四千光明。是以惠心勸其白毫一相所放光明云有七百五俱胝六百萬光明。次白毫作用者、謂白毫所放光明中現衆事也。惠心意云其所現之境界不出十法界。謂應以佛身得度者、即現彼白毫光作佛身。⁽³¹⁾

③⑪ 阿彌陀經釋

惠心問曰。此經說阿彌陀功德外無別躰、今文何故別讚

經名。答曰。此義不然、佛與法已別也。故各有利益。所以佛者阿彌陀佛也、法者阿彌陀經名也。阿彌陀佛者人也、阿彌陀經者法也。人法各別也。故各有利益也。⁽³²⁾云々

③② 阿彌陀經釋

次出人法各別例。云々略記云。如下品上生者、壽終之時、聞諸經名除千劫罪、稱佛名故除五十億劫罪、又大論第九云。有一比丘、誦阿彌陀經及摩訶般若。是人欲死時、語弟子云、阿彌陀佛、與彼大眾、俱來即時動身、目得見、須臾命終、積薪燒之。見舌不燒、誦阿彌陀經故見佛自來、誦般若經故舌不燒、乃至處々有人罪垢結縛、一心念佛信淨不疑、必得見佛、證不虛也。云々明知、各有利益。⁽³³⁾云々

③③ 逆修說法

往生要集對治懈怠章、舉佛功德二十種中、第二讚歎名號功德。引維摩經云。諸佛色身威相種種姓戒定智慧解脫知見力無所畏不共之法、大慈大悲威儀所行及其壽命、說法教化、成就衆生、淨佛國土、具諸佛法悉皆同等。是故名爲三藐三佛陀、名爲多陀阿伽度、名爲佛陀、阿難若我廣說此三句義、汝以劫壽不能盡受。正使三千

大千世界、滿中衆生、皆如阿難、多聞第一、得念總持、此諸人等、以劫之壽、亦不能受。已上又西方要決云。諸佛願行成此果名。但能念號、具包衆德。故成大善。⁽³⁴⁾已上

③④ 法然聖人御說法事

マツ光明ノ功德ヲアカサハ、ハシメニ无量光ハ、經ニノタマハク、无量壽佛ニ八萬四千ノ相アリ、一ノ相ニ、オノオノ八萬四千ノ隨形好アリ。一ノ好ニマタ八萬四千ノ光明アリ、一ノ光明アマネク十方世界ヲテラス、念佛ノ衆生ヲ攝取シテステタマハストイヘリ。惠心コレラムカヘテイハク、一ノ相ノ中ニ、オノオノ七百五俱胝六百萬ノ光明ヲ具セリ、熾然赫奕タリトイヘリ。一相ヨリイツルトコロノ光明カクノコトシ、イハムヤ八萬四千ノ相オヤ。マコトニ算數ノオヨフトコロニアラス。カルカユヘニ无量光トイフ。⁽³⁵⁾

③⑤ 天台宗の人との問答

上人答給はく。彌陀因位の時、一切衆生に代りて、兆載永劫の間、六度萬行、諸波羅蜜の一切の行を修して、其功德を悉く六字の名號に納められたる間、萬行萬善諸波羅蜜、

三世十方の諸佛の功德の、六字の名號にもれたるはなし。故に是を極善最上の法とも名く。されば恵心僧都の、因行果徳、自利利他、内證外用、依報正報、恒沙塵數、無邊法門、十方三世、諸佛功德、皆悉攝在、六字之中、是故稱名、功德無盡と判し給へるは此心也。³⁶

(4) 寿命の功德

③⑥ 法然聖人御說法事

次ニ壽命ノ功德トイフハ、諸佛壽命意樂ニシタカフテ長短アリ、コレニヨテ恵心僧都四句ヲツクレリ。アルイハ能化ノ佛ハ命ナカク、所化ノ衆生ハ命ミシカキアリ。華光如來ノコトシ。佛ノ命ハ十二小劫、衆生ノ命ハ八小劫ナリ。アルイハ能化ノ佛ハ命ミシカク、所化ノ衆生ハ命ナカキアリ。月面如來ノコトシ。佛ノ命ハ一日一夜、衆生ノ命ハ五十歳ナリ。アルイハ能化所化トモニ命ミシカキアリ。釋迦如來ノコトシ。佛モ衆生モトモニ八十歳ナリ。アルイハ能化所化トモニ命ナカキアリ。阿彌陀如來ノコトシ。佛モ衆生モトモニ无量歳ナリ。カルカユヘニ經ニノタマハク、佛告ニ阿難ニ、无量壽佛壽命長久不可勝計、汝寧知乎、假使十方世界无量衆生皆得人身、悉令成就聲聞緣覺、都共推算計禪思一心竭其智力、於百千萬劫、悉共推算計

其壽命長遠之數、不能窮盡知其限極、聲聞聞菩薩天人之衆壽命長短亦復如是、非算數譬喻所能知也トノタマヘリ。タタモシ神通ノ大菩薩等ノカスヘタマハムニハ、一大恒沙劫ナリト、大論ノココロヲモテ恵心勘ヘタリ。コノ數、二乘凡夫ノカスヘテシルヘキカスニアラス。カルカユヘニ无量トハイヘルナリ。³⁷

(5) 光明の功德

③⑦ 法然聖人御說法事

コノ阿彌陀佛ノ常光ハ、八方上下無央數ノ諸佛ノ國土ニオイテテラサストイフトコロナシ。八方上下ハ、極樂ニツイテ方角ヲオシフルナリ。コノ常光ニツイテ異説アリ。スナワチ平等覺經ニハ、別シテ頭光ヲオシエタリ。觀經ニハスヘテ身光トイヘリ。カクノコトキ異説アリ。往生要集ニ勸カヘタリ。ミルヘシ。常光トイフハ、長時不斷ニテラス光ナリ。³⁸

③⑧ 逆修說法

先明ニ光明功德者、初無量光者、經云。無量壽佛有八萬四千相一々相各有八萬四千隨形好復有八萬四千光明一々光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨。云々恵心勘之云。

一々相中、各具二百七十五俱胝六百萬光明、熾燃赫奕。云々
從一相所出光明如斯、況八萬四千相乎。誠非算數
所及。故云無量光。⁽³⁹⁾

③⑨ 逆修說法

如是而雖有十二光名、取要在斯。大方彼佛光明之功德中、備如是義。細明者可有多種。大分有二。一常光、二神通光也。初常光者、諸佛常光各々隨意樂有遠近長短。或云常光面各一尋相、如釋迦佛常光是也。或照七尺、或照一里、或照一由旬、或照三三四五乃至百千由旬、或照一四天下、或照一佛世界、或照二佛三佛乃至百千佛世界。此阿彌陀佛常光、於八方上下無央數諸佛國土無所不照。八方上下付極樂指三方角也。就此常光有異說。則平等覺經別指頭光、觀經惣云身光。⁽⁴⁰⁾異說往生要集勸之、可見矣。常光者長照不斷照光也。

④⑩ 逆修說法

辨此常光、乃有異說。平等覺經別指頭光、觀經惣云身光。往生要集廣解其義。今略不舉也。⁽⁴¹⁾

④⑪ 逆修說法

先明光明功德者、初無量光者、經云。無量壽佛、有八萬四千相。一一相、各有八萬四千隨形好。一一好、復有八萬四千光明。一一光明、遍照十方世界念佛衆生、攝取不捨。云々惠心勸之云。一一相中、各具七萬俱胝六百萬光明、熾然赫奕。一相所出光明、如斯、況又八萬四千相乎。誠非卒數所及。故云無量光也。⁽⁴²⁾

(6) 依正の功德

④⑫ 阿彌陀經釋

付正報、亦有佛、有菩薩、有聲聞、有阿鞞跋致衆生、亦有二生補處菩薩。此等依正功德前已顯了、重不可申上。且付其中、多有二生補處文、惠心僧都以此名聖衆供會樂。云々聖衆者誰哉、即是普賢文殊彌勒等是也。⁽⁴³⁾

(7) 善導の義を補助

④⑬ 無量壽經釋

次依二感師智榮等、補助善導之義者、是有七智榮、二信仲、三感師、四天竺覺親、五日本源信、六禪林、七越州。⁽⁴⁴⁾

④無量壽經釋

五日本源信有^二一意^一。一^二三重問答^一。一^二專修等^一。^{立^二十門^一、^二專明^一念佛往生^一、捨^二諸行^一。其中至^二第八門^一、相對念佛諸行^一、有^二三番問答^一、後日可^レ釋^レ之。是則捨^二諸行^一、取^二念佛^一、取捨意也。次至^二第十門^一、亦有^二十門料簡^一。謂極樂依正乃至第十助道人法也。其中第二往生階位中、有^二二問答^一。以^二善導專雜二修義^一、問答決擇。其問答別書^レ之。可^レ見。故知。惠心意、始於^二二行^一論^一取捨、次導善^一得失義^一。云^云⁽⁴⁵⁾}

(8) 雜行と諸行

④十二問答

問法華眞言オハ、雜行ニイルヘカラスト、アル人申候オハイカム。答、惠心ノ先德、一代ノ聖教ノ要文ヲアツメテ往生要集ヲツクリタマヘル中ニ、十門ヲタテテ、第九ニ往生ノ諸門ノ中ニ、法華眞言等ノ諸大乘ヲイレタマヘリ。諸行ト雜行ト、コトハハコトニ、ココロハオナシ。イマノ難者ハ惠心ノ先德ニマサルヘカラサルナリ。云^云⁽⁴⁶⁾

④禪勝房に示されける御詞

二問曰。於^二法花眞言^一者不^レ可^レ入^二雜行中^一云、如何對^二治此難^一候。答云。惠心先德集^二一代聖教^一造^二往生要集^一立^二

十門^一、其中第九門是往生諸業也。已法花眞言等諸大乘經被^レ入^二諸行^一。諸行與^二雜行^一言異其意同、今難者不^レ可^レ勝^二惠心先德^一歟。⁽⁴⁷⁾

(9) 往生を勧める經論

④阿彌陀經釋

夫所^レ說往生極樂之趣旨、經論其數甚多不^レ可^レ勝計^一、且其中取^レ要抽^レ詮、無^レ過^二三部經^一。謂無量壽經、觀經、阿彌陀經也。以^レ何知^レ之者、略有^二六文^一。一善導疏文、二天台十疑文三慈恩要決文、四迦才淨土論文、五智景疏文、六惠心往生要集文也。⁽⁴⁸⁾

④阿彌陀經釋

六惠心往生要集文者、彼往生要集中、亦引^二前天台十疑、迦才淨土論文^一、爲^二往生極樂證^一。以之案之、往生極樂經論、雖有^二其數^一、以此三部經爲^二其要^一也。云々⁽⁴⁹⁾

(10) 三心

④往生大要鈔

されば善導の觀經の疏に、九品の文を釋するしたに、一々の品ごとに、辨^二定三心^一以爲^二正因^一とさだめて、この三

心は九品に通ずべしと釋し給へり。惠心もこれをひきて、禪師の釋のごときは理九品に通ずべしとこそはしるされたれ。この三心の中の至誠心なれば、至誠心すなはち九品に通ずべき也。⁵⁰

(11) 兜率と西方

⑤ 要義問答

問、十方ニ淨土オホシ、イツレオカネカヒ候ヘキ。兜率ノ上生ヲネカフ人モオホク候。イカカオモヒサタメ候ヘキ。
答、天台大師ノノタマハク、諸教所_レ讚多在_二彌陀_一、故以_二西方_一而爲_二諸一順_一ト。マタ顯密ノ教法ノ中ニ、モハラ極樂ヲススムル事ハ、稱計スヘカラス。惠心ノ往生要集ニ、十方ニ對シテ西方ヲススメ、兜率ニ對シテオホクノ勝劣ヲタテ、難易相遠ノ證據ヲヒケリ、タツネ御覽セサセタマヘ。極樂コノ土ニ縁フカシ、彌陀ハ有縁ノ教主ナリ。宿因ノユヘ、本願ノユヘ。タタ西方ヲネカハセタマフヘキトコソオホエ候ヘ。
問、マコトニサテハ、ヒトスチニ極樂ヲネカフヘキニコソ候ナレ、極樂ヲネカハムニハ、イツレノ行カスクレテ候ヘキ。⁵¹

⑤ 良忠上人傳聞の御詞

先師語云、故上人云要集會通是一途也。予所存者以_二玄奘入天願_一可_レ會_レ之。謂有_二三願_一、一者願_レ見_二十七地論天竺梵本_一論也。二者願_レ見_二勝天王般若大品般若等廣本_一。三者願_レ值_二兜率行者_一故、三藏只尋_二都率行者_一故多值_二兜率行者_一。不_レ尋_二西方行者_一故不_レ值_レ之歟。例如下雖_レ值_二龍智闍梨_一、唯習_二三論_一不_レ傳_二眞言上乘_一。⁵²

(12) 別時念佛

⑤ 七箇條の起請文

一、とき／＼別時の念佛を修して、心をも身をもはけましと、のへす、むへき也。日々に六萬遍を申せは、七萬遍をとなふれはとて、たゝあるもいはれたる事にてはあれとも、人の心さまは、いたく目もなれ耳もなれぬれば、いそ／＼とす、む心もなく、あけくれは心いそかしき様にてのみ、疎略になりゆく也。その心をためなおさん料に、時々別時の念佛はすへき也。しかれば善導和尚も、ねんころにす、め給ふ、惠心の往生要集にも、すゝめさせ給ひたる也。道場をもひきつくりひ、花香をもまいらせん事、ことにちらのたへむにしたかひてかさりまいらせて、わか身もことにきよめて道場にいらりて、あるいは三時、あるいは六時な

んとに念佛すへし。もし同行なんとあまたあらん時は、かはるゝいりて不斷念佛にも修すへし。かやうの事はおのゝことからにしたかひてはからうへし。⁽⁵³⁾

(13) 平生と臨終

⑤③ 十七條御法語

又云、往生ノ業成就、臨終平生ニワタルヘシ。本願ノ文ニ別ニエラハサルカユヘニト云リ。惠心ノココロ平生ノ見ニワタル也ト云リ。⁽⁵⁴⁾

(14) 念仏者

⑤④ 阿彌陀經釋

次聞佛所說歡喜信受者、奉行相也。一結前生後者、云々二奉行人者、聞上念佛往生法、奉行之人也。付此奉行人、其數甚多、唯非一人。云々有聲聞、有菩薩、有雜衆。聲聞中亦有舍利弗、有目連、有迦葉、有阿難、有羅云、有賓頭盧。菩薩中亦有文殊、有彌勒、有常精進。雜衆中亦有天、有人、有帝釋、有阿修羅。或人釋之。惠心智慧深利者、相從舍利弗、神通大力者、悉相從目連。其餘尊者各有所掌徒衆。如渴飲、須廣治妙道。迦葉、阿難傳持應遠、羅云賓頭

盧守護至八萬歲。況復文殊是三世諸佛智母、十方淨土諸法之首。彌勒是諸佛長子、當來導師。乃至常精進爲一切衆生不請之友。何時何處方得不弘通。乃至天龍八部福力自在王、領世間者、常護助流通也。此中且大聖文殊、以念佛三昧法門、弘通給。⁽⁵⁵⁾

(15) 十六觀・三福・九品

⑤⑤ 觀無量壽經釋

次華座在處、善導云。彌陀化主當心坐、華臺獨廻最爲精。云云。惠心云。中央最上地上。云云。⁽⁵⁶⁾

⑤⑥ 阿彌陀經釋

次惠心僧都釋但念佛往生之由了、問曰。何故此經不說十六想觀。此問意者、十六想觀者、日想乃至下輩生想也。今經何故不說彼十六想觀、何故不說三福大善說此稱名念佛云也。即答曰。運念於帷帳之中、決證於塵刹之外、其不如此念佛、故今經不三要勸餘觀、廣略隨宜不得一例。⁽⁵⁷⁾

⑤⑦ 選擇本願念佛集

何故不說上上品中至下下品而說念佛乎。答曰豈前

不_レ云。念佛之行廣互_二九品_一。卽前所_レ引往生要集云_レ隨其勝劣_二應_レ分_二九品_一是也。加之下品下生是五逆重罪之人也。而能除_二滅逆罪_一所_レ不堪_二餘行_一、唯有_二念佛之力_一能堪_レ滅_二於重罪_一。故爲_二極惡最下之人_一所_レ說_二極善最上之法_一、例如下彼無明淵源之病非_二中道府藏之藥_一卽不_レ能治。今此五逆重病淵源。亦此念佛靈藥府藏。非_二此藥_一者何治_二此病_一。⁵⁸

(16) 対天台

58 送山門起請文

爭慰_二貧道之愁歎_一哉。凡彌陀本願云。唯除_二五逆誹謗正法_一。云。勸_二念佛_一之徒、爭謗_二正法_一。惠心要集云聞_二一實道_一入_二普賢願海_一云云。欣_二淨土之類_一、豈捨妙法_一哉。就中源空、當_二念佛餘暇_一披_二天台教釋_一。凝_二信心於玉泉之流_一、致_二渴仰於銀池之風_一。舊執猶存、本心何忘。且憑_二冥鑒_一、且仰_二衆察_一。⁵⁹

二

法然法語における源信およびその著作の引用は、書名や人名をあげるにとどまらないが、今は書名等を明示するものにより資料を整理してみた。ここで知られることがいくつか指摘でき

る。まず引用書については『阿弥陀仏白毫觀』や『阿弥陀経略記』等があるが、圧倒的に『往生要集』が多いことである。⁶⁰これは法然自身が語るように『往生要集』によって浄土の法門に入ったからであり、また叡空について『往生要集』を学んだことも理由にあげられるであろう。⁶¹また『往生要集』の註釈を多く残しているほど教学形成の上に大きな影響がある。⁶²源信の名を示すときはほとんど「惠心」とあり、直接の僧名で呼称するのではなく、尊称の形をとっている。ここで引用資料については同様の内容のもので漢文と和文があつたり、書名は異なつていても内容が同様文の場合は省略をしているので、ここにあげたものがすべての引用ではないことをお断りしておきたい。

これらの引用は同じ立場・趣旨のもとに行われたものではなく、それぞれ引用の事情が異なっている。そこで次にこれらの引用を分類別けをして法然が何のために引用したかを調査することによって、法然が源信を引用する傾向の特色を明らかにすることができよう。ひとまず引用の立場を次のように分類してみる。

(一) 自己の主張を論証するもの

- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(二) 主張の相違を示すもの

⑥ ⑭ ⑮ ⑤⑧

(三)源信を批判するもの

⑫ ⑪

このようにみてみると、自己の主張を論証するものが圧倒的に多いことがわかる。念仏や名号の功德性を述べるところに特に多用される。しかし法然は源信を手ばなしで善導と同じようには位置づけていないことが知られる。明確に主張のちがいを示すものもあり、またその立場からかえって源信を批判するものもある。これは善導の引用はすべて依拠のためであり、批判がないのに比べると、同じように依拠のために引く祖師であっても、基本的立場のちがいが指摘されるのである。⑥の法語は同じ念仏でも『往生要集』の念仏と善導勸化の念仏は区別されるものであり、⑭は善導は観念念仏を観仏三昧といい称念念仏を念仏三昧と区別するのに対し、源信は観念と称名ともに念仏三昧といって区別しないことを指摘して相違を明らかにしている。⑯も同様の内容である。⑮は天台と区別しながらも、叡山で学んだ行学を受けついでいることを述べている。そしてこのような立場のちがいから⑯では真如観という観念は源信の勧めの修法であっても「わろき物」と退けているし、⑰では浄土を説く經典や帰依の対象の仏を別体とみるか同体とみるかというちがいが述べられている。源信は天台の生仏不二の立場を受け

ているが、法然は仏と人、法と人とを二元的にみており、基本的相違がある。この相違は善導の二元的仏教観を受けた法然であるから、天台の一元的仏教観に立つ源信との決定的相違があるので、この点においては両者の一致を見出すことはできない。しかし念仏の位置づけや念仏を勧める立場、諸行との関係、仏身や名号の功德のことに言及する時には、法然は当然善導を引いて主張することになるが、その一方で源信を随所に引いて所説を補助したり、また積極的に論証に用いている。

三

次に法然が源信を引くなかで、念仏のことおよび念仏を勧めることについてはほとんど自説を補強するために用いられているが、念仏と諸行について論ずるところに一つの特色がみられると思うので、これについて検討を加えてみたい。念仏と諸行の関係については種々の引用があるが、⑳の資料に注目したい。

念仏による往生を求めるものにとって、『観無量寿經』等に説かれるように、機根に随って種々の実践が示され、念仏との関係がとりあげられる。いわゆる諸行が説かれるが、阿弥陀仏の浄土に往生するためには諸行を棄てて念仏に依るべきことが善導等の勧めによって示される。ところが念仏と諸行との関係

において最初から念仏のみを示すことによってすべてが解決することができないところがある。それは機根の異なりにおいて一律にはならないところが出てくるからである。このことについて法然は、念仏のほかには諸行が示される理由について次の三意をあげている。⁽⁶⁴⁾

① 諸行を廃して念仏に帰せんがための故に諸行を説く

② 念仏を助成せしめんがために諸行を説く

③ 念仏と諸行との二門に約しておのおの三品を立てんがために諸行を説く

この三つの立場について、①は廃立の義、②は助正の義、③は傍正の義の三義であるという。この三義のうち善導の義によれば①の廃立の義でなければならない。ここには源信の入る余地はない。しかしすべてが廃立の義でただちに解決するならば何ら問題はないが、本願念仏への帰入は時代性もあつて容易に成就するものではない。法然が諸行と念仏との関係を述べるにあつて、廃立の立場へとみちびくために助正の義や傍正の義をあげているのではないと思われる。『法華経』所説の三乗と一乗の関係のように、声聞や縁覚がただ菩薩をきわだたせ廃捨するために説かれたものでないように、やがて菩薩の立場の廃立の義へと導かれることになる。このように考えるとき、『往生要集』を引いて示される助正の義や傍正の義も、廃立の義への導

入として示されているといえる。助正の義や傍正の義を必要としないで廃立の義へ導かれることが本来ではあるが、多くの機根のありかたに対応しなければならぬのである。この点については法然自身も自からの仏道を顧みて但信の称名念仏へ導かれた道程を述べている。『乗願上人伝説の詞』に

乗願上人のいはく、ある人問ていはく、色相観は観經の説也。たとひ称名の行人なりといふとも、これを観ずべく候か、いかん。上人答ての給はく、源空もはじめはさるいたづら事をしたりき。いまはしからず、但信の称名也と。⁽⁶⁵⁾

とあり、仏身の相好を観念する念仏の方法を修していたことが示されている。また『隆寛律師伝説の詞』には

隆寛律師のいはく、法然上人の給はく、源空も念仏のほかに、毎日に阿弥陀經を三卷よみ候き。一卷は唐、一卷は呉、一卷は訓なり。しかるを、この經に詮するところ、たゝ念仏申せとこそとかれて候へは、いまは一卷もよみ候はす。一向念仏を申候也と、隆寛⁽⁶⁶⁾毎日阿弥陀經四十八卷よまれきすなはち心えて、やかて阿弥陀經をさしをきて、念仏三万遍を申しきと。⁽⁶⁶⁾

とあつて、説誦と念仏との関係について触れていて、一向但信の念仏へと導かれていく過程をみる事ができる。⁽⁶⁷⁾法然においては廃立・助正・傍正という念仏と諸行との関係にあつて、

阿弥陀仏に対する絶対の信仰のありかたからいえば廢立を理想としなければならぬが、最初から理想の状態があるものでもなく、信仰の深まる過程をも認めていく立場があり、教学の幅を考へておこなうてはならない。ここに法然における念仏信仰の入口と奥行ということが示されるのである。このことについては念仏と諸行ということにとどまらず、神祇の問題、悪人正機の問題など、いずれにも適応することである。⁽⁶⁸⁾

小 結

法然における源信の受容と展開について、確実に名称を表わして引用する法語を抜き出し、法然における源信の引用の特色の一端を検討してみた。法然は「恵心を用うるの輩は必ず善導に帰すべし」(『往生要集』の釈)から「正しく善導に依り、傍らに諸師に依る」(三部経の釈)へ、そしてさらに「偏えに善導一師に依る」という諸師から善導一師へしぼられる念仏信仰の深まりのなかで、その教学の表明にあたっては善導のみならず、諸師とくに源信の教えが随所に引かれ、影響力の大きさを知ることができる。それは法然が「往生要集によりて浄土の法門に入る」という契機の大きさもあり、また源信という存在、とくに『往生要集』の影響力の大きさに依るものでもあろう。

検討してきたように、源信を引く引きかたにはいろいろあるが、とくに法然教学の特色をなす教えの幅、すなわち信仰の入口と奥行という懐の深い教学のありかたは、まさに源信の示した念仏と諸行との関係からヒントを得たものと思われる。ここに万人救済を説く法然の教学の深さと大きさを知ることができる。

〔註〕

- (1) 『修学についての御物語』(『昭和新修法然上人全集』—以下『昭法全』—四八六)、『二期物語』(『昭法全』四三六—四三七) ほか。
- (2) 『昭法全』三二五
- (3) 『昭法全』四八六
- (4) 『昭法全』五三—五三四
- (5) 『昭法全』五六四
- (6) 『昭法全』五七三
- (7) 『昭法全』七四三
- (8) 『昭法全』七五一
- (9) 『昭法全』七六二
- (10) 『昭法全』八〇九
- (11) 『昭法全』六一八—六一九
- (12) 『昭法全』六二〇
- (13) 『昭法全』六四八
- (14) 『昭法全』四七二
- (15) 『昭法全』四七一—四七二
- (16) 『昭法全』四六九

- (17) 『昭法全』 四六九—四七〇
- (18) 『昭法全』 四二一—四二二
- (19) 『昭法全』 八五
- (20) 『昭法全』 九〇
- (21) 『昭法全』 九六—九七
- (22) 『昭法全』 一二三
- (23) 『昭法全』 一三一—一三二
- (24) 『昭法全』 一三二—一三三
- (25) 『昭法全』 二四一
- (26) 『昭法全』 二九五
- (27) 『昭法全』 三二二—三二四
- (28) 『昭法全』 三一九—三二〇
- (29) 『昭法全』 七五五
- (30) 『昭法全』 八〇
- (31) 『昭法全』 二五六—二五七
- (32) 『昭法全』 一四〇
- (33) 『昭法全』 一四〇—一四一
- (34) 『昭法全』 三〇七
- (35) 『昭法全』 一八六
- (36) 『昭法全』 七一九
- (37) 『昭法全』 一九二—一九三
- (38) 『昭法全』 一八九
- (39) 『昭法全』 二四五
- (40) 『昭法全』 二四六
- (41) 『昭法全』 二九〇
- (42) 『昭法全』 二八九
- (43) 『昭法全』 一三四

法然における源信教学の受容と展開

- (44) 『昭法全』 八六
- (45) 『昭法全』 八六—八七
- (46) 『昭法全』 六三三
- (47) 『昭法全』 六九七
- (48) 『昭法全』 一三〇
- (49) 『昭法全』 一三一
- (50) 『昭法全』 八〇
- (51) 『昭法全』 六六六
- (52) 『昭法全』 七六六
- (53) 『昭法全』 八二—八三
- (54) 『昭法全』 四六九
- (55) 『昭法全』 一四一—一四二
- (56) 『昭法全』 一〇二
- (57) 『昭法全』 一三七
- (58) 『昭法全』 三三七
- (59) 『昭法全』 七九四—七九五
- (60) 『阿弥陀仏白毫観』は三寶院の旧記(『三寶院旧記』とする)によれば、天元四年(九八一)六月四十歳の時、『往生要集』は寛和元年(九八五)四月四十四歳の時の成立であり、『阿弥陀経略記』は長和三年(一〇一四)十二月七十三歳の晩年に成立している。
- (61) 註(一)に同じ
- (62) 法然の各伝記、また凝然の『浄土法門源流章』にも、『昔源信僧都作「往生要集」。伝之之後世。自爾已来歴世相伝。乃至黒谷叡空大徳伝持此集。成二并浄業。源空随二叡空二学此集得旨。』(『大正新修大蔵経』八四・一九六中)とある。
- (63) 法然には『往生要集詮要』『往生要集料簡』『往生要集略料簡』『往生要集釈』の四釈があるが、これらの成立や順序をめぐって諸説

がある。

(64) 『選択集』(『昭法全』三三二―三三三)

(65) 『昭法全』四六四

(66) 『昭法全』四六四

(67) 藤堂恭俊稿「異類助成攷―『選択集』第四 三輩章を中心として―」(『法然上人研究』所収) 参照

(68) 神祇問題については、浅井成海稿「法然における神祇の問題」(『真宗学』六二)、拙稿「浄土門確立の一側面―法然における外教の問題をめぐって」(『日本仏教学会年報』六十二)等参照。悪人正機の問題については醍醐本の『法然上人伝』の中の「三心料簡および御法語」に「善人尚以往生況悪人乎事^{口伝}之」(『昭法全』四五四)という法然の法語が伝えられていることを根拠に梶村昇氏の『悪人正機説』(大東出版社、平成四年)の出版を機に、その創説をめぐって問題提起された。最近の諸研究については安達俊英稿「悪人正機」(日本仏教研究会編『日本仏教の研究法―歴史と展望』所収)を参照されたい。神祇の問題については最初から不拝を提唱するものではなく、悪人正機も同様であり、教学の入口と奥行という幅がみられる。この点が法然はあいまいな念仏觀を示したとする評価に陥りやすくなるが、ここに法然の浄土教の弾力性がみられるところであり、少しもあいまいではないのである。